

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学部・1年

氏名: 上山 陽介

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>この研修の活動によって、自分の意見を自分で伝える積極性は大きく向上したと思う。そして、私は主体的に学ぶ姿勢が大切であることに気づいた。研修前の私は、受け身の姿勢が先行してしまい、疑問に思ったことを自分で質問することがなかなかできなかった。しかし、研修先での企業訪問や工場見学、現地の学生と議論をして、どの活動においても共通して、自ら質問する積極的な姿勢で取り組まなければ、何も得ることはできないことがよく分かった。また研修では、人の話を聞き、自分自身の考えを持ち、自ら進んで話すことにも意識して取り組んだ。当然だが、人の話をよく聞かなければ、話の内容は理解できないし、思考することもできない。主体的な学びとは、話の内容を発展させるため自身の意見を相手に伝え、それに対する相手の答えを聞き、そして自分で熟考することだと思う。しかし、現地の人との会話はいつもスムーズなものではなく、「英語の語彙力が欠けている」、「論点がずれている」と感じる瞬間はたくさんあった。特に、PBL(Problem-Based Learning: 問題解決型学習)の活動では現地の学生に頼ることが多く、自分の考えを上手く伝えることができなくて悔しい思いをした。しかし、現地の学生と協力し合い、無事1つのプレゼンを達成することができたことは、私にとって大きな自信となった。さらに研修中は、自分の意識の甘えから小さなトラブルを種々起こしてしまった。トラブルがなぜ発生したのかを自分自身で振り返り、分析した経験は、今後、問題解決能力の向上に生かされると思う。最後に、現地の学生と交流し、実際に異文化を体験できたことは貴重な経験になったと思う。そして、海外の学生は私に比べると高い意識と熱意を持って、勉強に励んでいることがよく分かった。今後自分がどのような力を身に付ければいいのか、何をすればいいのかを考えながら、これから色々なことに挑戦していきたい。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>研修中は英語でのコミュニケーションを避けることができなかったのも、自分の知っている範囲の英語で伝えようと努力したが、自分の英語力不足が随所に出てしまい、英語で自分の考えを表現することが困難だと思う場面が多々あった。今後は、日常生活においても英語を実践的に使い、英語の4技能(「聞く」、「読む」、「話す」、「書く」)全てのレベルアップに努めたい。そして、研修でできた海外の友達とは連絡を取り合い、再会したときに対等に研究について話し合いができるように、専門的な知識も多く身に着けたいと考えている。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部・1年

氏 名: 横山 奈那子

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンプリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>この研修を通して得たことは多くあるが、特に印象的なことを述べていきたいと思う。まず、唐突だが、はっきり言って私は集団行動が苦手である。自分のしたいことを優先させたいし、海外などなかなか来られない場所ではなおさらそう思う。しかし、今回研修中に引率の先生方にご指導を受けたことや先輩方と日々を共にしたことで、そんな自分の姿を反省した。もちろん自分なりにポリシーを持ってやっていることもあるが、今回は重きを置く点が自分の中で間違っていたことに気づいた。今回の研修は、たくさんの先生方や大人が、人材育成のために多くの時間や労力を削って用意してくださったものであり、かつ派遣された私たちは、鹿児島大学ひいては日本という国の名前をも背負っているということだ。自分の中で感謝の意識が低かったからそういう考えになったのだと思い、改めて物事の肝、いちばんの目的を常に心においておくことの大切さを感じた。次に自分の中での学習意識についてだ。渡航前に、法文学部であるにもかかわらず農学部の研修に参加した理由と目的を明確化するよう先生からアドバイスを頂いてはいたが、それが少しずつ分かり始めたのは実際に渡航してからのことだった。農学部の研修ということでやはり訪問先も農業関係、アグリビジネスの会社などが多かった。Taniyama Siamという会社を訪れた際にお話をしてくださった方が、てっきり農業を勉強された専門家なのだろうと思っていたら文系の経営学部出身とおっしゃっていて、自分にとって遠い世界のものだった国際事業と農業が途端に身近なものに感じた。そこでそれ以降、専門用語や製造過程の凄さなどはよく分からなくても、私は私が持てる視点からこの凄さを感じよう、という意識で臨んだ。例えばチットラダーを訪問した際、直接的に教えていただいたのはそこで作られている商品のことや技術についてだったが、私は、こんなにも素晴らしい技術とポリシーが受け継がれていることに感銘を受け、没後もこれだけの影響力を持つ前プミポン国王に興味を持った。なぜ彼は愛されているのか？という自分なりのテーマを設定しコースを回ると、農業のことだけではなくタイの歴史などについても見えてくる気がしてとても有意義な時間が過ごせた。このように、現地での12日間全日程を通して様々なことを学ぶことができた。加えてこれらの学びが私にとって大変楽しいものであったことは何よりの成果であったと思う。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>まず私がこの研修に参加しようと思ったのは、「国際」と「バイテク」が自分の中で繋がりを持つワードではなかったため、詳しく知りたいと思ったからである。説明会に足を運んでみて、まずは異文化交流から始めようという先生方の意向を知って、文系の自分にも学べる可能性があるかもしれないという期待を感じ応募した。バンコクで人々の生活を垣間見て今回設定することができたこれからの抱負は、まず世界の状況を知ること。そして、苦しむ人を救いたいという気持ちを忘れないことである。今回の研修は、日本では得られない気づきと経験をわたしにくれた。この抱負を忘れずこれからはビジョンの明確化とその実現に取り組んでいきたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部・1年

氏 名: 門前 樹乃

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私は今回このバイテク技術を学ぶという理系向けの海外研修に文系の立場から参加した。普段は学ぶ機会がほとんどない植物の栽培や加工、流通について、タイ王国のバイオテクノロジー技術を通じて学ぶ機会であると同時に、現地の学生との交流を通じて、バックグラウンドが文系の私でも得られるものがあるのではないかと考えたからだ。今回の研修で私が得た一番の成果は、日本では触れることのないタイの文化や生活習慣、宗教観などに対する視野が広がったこと、そして現地の学生との交流を通じて自分の学びや将来設計に対する大きい刺激をうけられたことである。まず、衣・食・住に関する習慣や学生の学校生活など身近な問題から、タイの農作物やそれらの輸出入に関する規制や、王室プロジェクトの歴史など、タイ王国について多岐にわたる文化を知ることができた。また、その文化を理解することで、現地で生活する外国人学生の立場として遵守しなければならない事柄を自覚したうえで、お客様としての受け身ばかりでなく自ら学びに来た学生であるという自覚をもって、滞在中のさまざまな活動内容において自発的な行動に繋げることができた。そしてタイ王国の文化を日本人(外国人)の立場から見ること、自国の文化についても客観的に考える良い機会ともなった。日本の文化と比較することで、国民性の違いや、価値観の違いに気づくこともできた。一方で、研修中に訪問したアユタヤの日本人村からは、タイ王国と日本は数百年前から交流があり、互いを理解する関係であったことも学んだ。私は日本と他の国との国際関係にも関心を持っているが、国際関係を学ぶ際には、現状だけでなく、歴史的側面についても合わせて理解していきたいと思う。このほか、私自身の学習意欲や将来設計に大きな影響を受けたことも、研修を通じた成果として大きい。現地の学生との交流ではお互い英語が母国語ではない学生同士ながらその英語力の差に愕然とさせられた。KMUTTIにはインターナショナルコースがあり、交流した学生の中には私たちのような「外国人」も多かった。彼らは英語とタイ語で講義を受け、学生生活を送っているとのことである。外国で長期の学生生活を送ることが、彼らの語学力や思考力を培う基盤になっていると思う。同じ学生という立場にありながら、彼らに教わるが多かったことが悔しくもあったが、それ以上に母国語でない言語で海外の学生と意見を交わしあったり、談笑をしたりする時間で、今までに経験したことのない高揚感を味わうことができた。私はまだ1年生で大学生としての経験が浅く、さらに法文学部という異分野の立場であったにもかかわらず、参加する機会があった意味を考えて、これからの自分の学びに役立てたい。この研修で得た経験を活かして、今後、社会に貢献していくことが、研修に参加する機会を与えてくださった先生方や大学関係者の方々に対する何よりの「お礼」になると考えている。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>この研修に参加する以前は英語の語学力を身につけたい一心で留学を目指していたが、今回の研修に参加したことで、「英語を学ぶ」とこと、「英語で学ぶ」とことの違いを理解させられた。短期ではあったが、現地の学生と生の英語で交流を重ねることで自分が英語を学びたいのではなく、英語を使って別の何かを学びたいのだということに自覚した。もちろん現地の学生と比べても私の語学力が劣っていたことは明らかであるが、学習量の無さよりは経験の無さがその差をより広げているのではないと思う。その経験の差を埋めるためには今日までの学習に加えてより多くの英語話者、その他の言語話者と接して自らの語学力の有用性を高めていくしかないのだと思う。これからはどのような場にも対応できる語学力を身に付けグローバルな視点を持つことで自己実現・社会貢献に繋げていきたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学部・2年

氏 名: 上芝原 日菜

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の研修を通して、自分の考えていることや疑問点を口に出して相手に伝えることの大切さを学んだ。私は、普段大学の授業を受けているときや誰かが発表しているときに、質問をしたりリアクションをしたりすることがこれまではほとんどなかった。しかし、今回の研修を通してそのような姿勢はよくなかったことに気づいた。今回交流させていただく学生に向けて研修プログラムの初めにプレゼンを行ったときに、大きなリアクションをしてもらいとてもうれしかった。一方で私たち日本人の学生は、ただ聞いているだけになってしまった。このことから、私は人の発表を聞くときに何も返さないのはとても失礼なことであると学んだ。この経験によって、次の日からの講義や企業訪問の時に、説明の後に質問をするという行動を身につけられたことはよかったと思う。</p> <p>また、国際交流をするためには語彙力と発想力が必要であると学ぶことができた。講義を受けているときは疑問点を聞いていくことでコミュニケーションをとることができた。しかし、食事の時間や自由時間のときに話題を見つけることができずあまりコミュニケーションをとることができなかった。英語力が自分に足りていなかったのはもちろん、何を話すか、話題について考える力も足りていなかった。研修の中でタイの学生と話し合い、一緒にプレゼンを作る問題解決型学習の活動があった。その中で、日本から準備してきた情報をタイの学生にうまく伝えられず、情報をあまり共有できなかったことが反省点であった。あちらの学生に任せてしまう部分も多々あった。もう少し自分に英語力と伝える力があれば、もっと意見を交換してこの活動を行うことができたと思う。</p> <p>さらに企業訪問をした際、日本の食の安全についてよく考えることができた。タイの街中で食事をする際には、正直日本の方が衛生面的によいと感じていた。しかし、食品工場や農作物を輸出している企業を訪問した際、HACCPのシステムが十分であること、日本へ農作物を輸出する際に農薬検査を十分に行っていることを学んだ。今までは買い物をする際に、国産のものがよいという考えを多く取っていた。しかし、今回の訪問先で、自分の考えは偏っていたことに気づくことができた。自分の目で見て、耳で聞くことは大切であると感じた。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修で自分の未熟さを痛感した。今後の抱負として、まず語彙力を高める。自分から進んで国際交流の場に行ったり、留学生と話したりすることによって達成していけると思う。自分が現地の方々に話しかけられたら、うれしかったため自分もそのような行動をしていく。また、集団で行動するときに周りが見えていなかったことが多々あったため、自分は何をすべきか、周りに迷惑をかけたり同じ集団のなかで周りが見えていない人はいないかなど、周囲に目を向けるようになる。今回の研修を経験したことで感じた自分の課題をしっかりと心に留めて、これからの大学生活およびその後の人生を過ごしていこうと思う。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学部・2年

氏 名: 野々下 悠里

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>外国人と外国語によりコミュニケーションすることの難しさを学んだ。また、タイの文化についても実際に触れることで、より日本とタイとの文化の違いを理解できた。まず、コミュニケーションについては、研修の初めは恥ずかしさや焦りによって何も話すことができなかったが、徐々に慣れてくるとジェスチャーなどを混ぜながら質問したり、会話をしたりできるようになった。講義も英語で行われた。私たち日本人もタイの学生も英語は母国語ではないので、上手くコミュニケーションが取れないこともあった。私が話す英語の文法や単語の発音が間違っているにもかかわらず、タイの方々はしっかりと聞いて理解しようとしてくれた。この経験より、何か伝えようとする意志が重要なのだと学んだ。PBL学習の際には、タイの学生から話しかけられる機会が多かった。意思疎通が上手くいかず、私は聞き手に回ってしまいあまり自分の意見を発言できなかった。この活動を通してタイの学生が英語での話し合いに慣れていると感じた。一方、私は議論の場でのふるまい方がまだできていないことを痛感した。また、言葉だけではなく、ジェスチャーや文字、図を使うことで考えがよりわかりやすく伝わることを学び、コミュニケーションには様々な方法を用いることができると学んだ。</p> <p>この研修を通して、タイの文化についても学ぶことができた。タイは仏教国であり、街中のいたるところに寺院があった。初めは、寺院に入るために服装のルールがあることに驚いたが、仏教を信仰する多くのタイの人々にとって寺院が大切な場所であることを学んだ。女性は僧侶に触れてはならないという決まりがあることも、日本とは異なる点だった。</p> <p>この研修中、実際に英語を使ってコミュニケーションを取る必要があった。しかし思うように話せないことが多かった。またタイの学生のレベルの高さに驚き、これからの学習へのモチベーションとなった。国際感覚を持つためには相手国を知る必要もあるが、日本のことも知る必要もあると思った。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>この研修での体験を活かして、さらに様々な研修や講義に参加したいと思った。また英語力が足りないことを実感したため、英語力を高めていきたい。特に読み書きの力だけでなく、話す力も鍛えたい。討論の場面では、今回のPBL学習の成果を活かしていきたい。タイの学生と交流することは、研究の専門分野は違うものの、刺激になった。今後はこの研修を思い出して勉学に励んでいきたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 工学部・2年

氏 名: 増永 成菜

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の研修を通して、様々な国の人と交流することができた。PBLでは、タイの学生と共に Zero Wasteについて考え話すことによって、話を聞くだけでなく自分の意見を英語で言う良い機会となった。今までは英語で自分から意見を述べたり質問をする機会はあまりなく、慣れないものだったが、実際にタイの学生と一つのプレゼンテーションを作り上げていく中で英語の会話が非常に大切なものであり、自分なりに考えて相手に伝えることが大切だと感じた。最終的にプレゼンテーションを作成し発表することで、コミュニケーションをとる難しさや英語での会話のスキルなど自分に足りないところを自覚することもできた。</p> <p>また、日本とは違う文化に触れることができた。何事にも挑戦し体験してみることが異文化を理解するきっかけの一つになると考える。実際に海外に行きその国の人々と交流することでタイの文化や習慣をより深く知ることができた。食事は多くの品を注文してそれぞれ取り分けて食べるが多く、タイの学生と交流する良い機会となった。またタイは仏教の国であるため、街中に多くのお寺が見られた。お寺を訪問する際には服装に関するマナーがあり、お寺が非常に神聖な場所でタイの人々が仏教を深く信仰していることが分かった。加えて、タイの人々が国王を敬愛していることが感じられた。特にフィールドトリップで訪れたロイヤルプロジェクトや博物館で、プミポン前国王をはじめチャクリ王朝歴代の国王について学び、国王への絶大な支持と敬愛の意味を考え理解することができた。食事や宗教などタイ特有の文化を知り体験することは、異文化を理解し受け入れるうえで非常に大切なことだと感じた。</p> <p>今回経験した、英語での講義やディスカッション、プレゼンテーションを通して、英語を勉強する目的やモチベーションを得ることができた。また異文化に触れることで、その文化を受け入れ理解するきっかけにもなった。この研修は、今後より多くの国の人々と出会い、異文化を知る良い機会となったと考える。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修を通して、自分のコミュニケーション能力と英語力をもっと身につけたいと感じた。私は英語が苦手で、まだ英語で会話するのが難しいが今後英語の勉強をする中で読み書きだけでなく多くの他国の人とコミュニケーションをとれるようになりたいと考える。そのために、大学などで開かれる国際交流の企画などに積極的に参加し英語でコミュニケーションを取れるようにしていきたい。英語を、他国の人と交流するためのツールの一つとして使えるようにしたいと考える。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者
 (学部または研究科・学年) 農学部・3年
 氏 名: 佐々木 真歩

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の研修では、KMUTTの学生や先生方、メンバーのお陰で普段味わうことのできない濃い11日間を過ごすことができた。この研修では、タイ米やドリアンのような作物についての英語での講義、味の素をはじめとする工場やラン農園など様々な企業の訪問をすることができた。また、研修の目玉であるPBL授業では、「ゼロウェスト」というテーマで現地の学生と議論、資料作成、口頭発表を行った。私たちの班では「農業廃棄物をどうできるか」というサブテーマで議論した。事前に作成した資料をもとに議論に臨んだが、まず言いたいことが英語で表現できず、相手が言っていることを理解するのも難しく、大きな言葉の壁に打ちのめされた。PBLを行うのは初めてで、世話をしてくれるタイの学生に頼ってばかりだったが、これを機に自分から積極的に議論参加できるようになりたいと強く思った。一つのテーマをみんなで協力して、一生懸命考えるととてもいい経験になった。</p> <p>研修を通して特に学んだことが2つある。一つ目は「恐れぬこと」である。日本を旅立つ前、英語が苦手な私はタイの学生と会話ができるかどうか一番心配だった。しかし、恐れず話しかけると、いつも笑顔で話してくれた。言葉だけでなく手ぶりや表情で伝えようとすると、相手との会話を楽しむことも出来た。11日間一緒に施設を訪問したり、昼食を共にする中でKMUTTの学生ともたくさん会話ができた。また、皆のお陰でたくさん笑ったような気がする。KMUTT学生が授業中、先生の話にうなづき、あいづちを打ち、積極的に質問をしている姿に刺激を受けた。私は、普段の授業では受け身になっていた。しかし、タイの学生を見て、意思表示をしっかりとすること、考えながら聞くことが、どれほど重要か気がついた。はじめは自分の聞きたいことが英語でうまく表現できず、とても悔しく恥ずかしかったが、周りの先生やみんながサポートもあり、日を重ねるごとに恐れず質問もできるようになった。二つ目は、「周りを見て、考え、そして行動すること」である。11日間、メンバーと一緒に過ごすなかで集団行動について引率の先生からの喝が入ることもあった。私たちは何がいけなかったのか必死に考え、最後に集団行動を成功させるために必要なことに気付いた。お陰で周りや相手のことをよくみて自分がどう行動すべきか意識するになり、集団行動の大切さを学んだような気がする。</p> <p>事前準備では岡本先生に多くの指導を頂いた。研修中も12名の仲間や引率教員、KMUTTの学生や先生のお陰で、「ああ楽しかった」と終わるのではなく、充実した11日間を過ごすことができた。この研修での経験は、言葉では表現できないほど大きく、自分の感じたこと・学んだことをこれからの生活に生かしていきたい。研修で多くの仲間や友達、先生方に出会うことができ、心から参加して良かったと思う。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>タイでは、大きな言葉の壁にぶつかった。日本で無意識にコミュニケーションを取れることが当たり前ではないことに気づいた。KMUTT学生ともっとコミュニケーションを取りたい。自分が聞きたいことも、十分に聞けなかった。このような経験を通じて英語をもっと勉強したいと心から思った。これまでは、英語に対する苦手意識が強く、勉強もあまりやっとなかった。研修を通じて英語の大切さに気付けたのは大きな収穫だ。KMUTT学生が、「お互い英語の勉強がんばろう」と言ってくれた。タイの学生も英語を熱心に勉強したからこそ今があるのだなと思った。KMUTT学生に次会う機会があれば、自由に話すことができるよう英語会話の勉強を頑張りたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学部・3年

氏 名: 田中 紗英

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ・バンコク市) ゲストハウス(ヘリコニアハウス)
研修期間	平成31年 2月12日 ~ 平成31年 2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の研修では「ZERO WASTE」をテーマにPBL活動をKMUTTの学生と行いました。事前準備として日本の事情やよく出てくる言葉の英単語を班の人と協力して調べました。実際の活動では事前準備をしていたにも関わらずあまり積極的に動くことができなかつたり、こちらの意図をうまく伝えることができなかつたり、KMUTTの学生が言っていることを理解できなかつたりしてなかなか思うように話し合いやパワーポイント作成を進めることができませんでした。しかし、KMUTTの学生の協力のおかげでなんとかパワーポイントを作り、発表を行うことができました。活動の中であなたの考えや意見はどう?と聞かれても答えることができませんでした。言葉の壁で話が今どういう風に進んでいるのかや相手の考えが分からない場合、分からないということを伝えなければならなかったなと思いました。もっと、このような形で発表したい、自分はこういう風に思うなどと自分の意見を言えるようにならなければならぬという課題が見つかりました。協調性があることも大事だとは思いますが、意思表示をし、自分の意見をしっかり持って、たとえうまく伝えられなくても伝えようと努力することが大事だということを学びました。また、PBL活動を通して海外の学生とでも日本の学生とでも臆することなくリーダーシップをとれるようになりたいと思いました。短時間の活動でしたが、この活動を通して今の自分に足りないもの、課題を見つけることができました。また、今回の研修ではタイの農業や食品バイテクについて学びました。しかし、改めて考えてみると私は日本の農業やバイテク事情について詳しく知らないなと思いました。今回学んだことについてさらに興味を深めるために日本の農業やバイテクについても学び、比較してみたいと思いました。この研修では食品会社等を訪問させていただきました。特に食品会社を訪問したとき、タイの食品会社は大きな会社でなくてもHACCPを取得しており、それは日本よりも進んでいるということを知り驚きました。</p> <p>11日間という短い期間の研修でしたが、多くのことを学び、また、様々な自分の課題を見つけることができました。今回の研修で感じたこと、考えたことを忘れず、自分の課題を克服していくための行動をしていこうと思いました。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修では多くの課題を見つけることができました。この中で最も強く感じたことは英語力のなさです。例えばこちらから質問をして、それについて相手が答えてくれても、答えてくれた内容が理解できず、分からずじまいになってしまったということです。また、思うように気持ちを伝えられずもどかしい思いもたくさんしました。これまでも英語の必要性を感じることはありましたが、今回の研修でさらに強く感じました。自分の思いを伝えるため、相手の言うことをもっと理解するために英語力を伸ばしたいと思いました。そのためにも少しずつ英語を勉強していきたいと思っています。また、今回の研修でみつけたのその他課題についても、克服に向けて明確な目標を立て行動していきたいです。</p>	